

# 世間解

第四二七号

令和五(二〇二三)年九月

発行 西法寺

## 念仏もうさるべし

― 聖徳太子に聞く(その五) ―

九月になりました。皆さま方には酷暑の中、ご本願のお念仏さまをご相続されておったことと存じます。さて、しばらく前から親鸞聖人が法然聖人のお弟子になつてくださる大きな機縁となつた聖徳太子の夢の告げについてお聞かせをいただいています。親鸞聖人が二十九歳の時、六角堂に参籠されて、

行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極楽  
という聖徳太子の示現(夢告)をうけられます。 梯實圓和上が、

「行者よ、そなたがもしも戒律を破つて配偶者を持たなければならぬ状況に置かれたときは私(観音)が玉女身(女性)となつてあなたの妻となりましょう。そしてお念仏申すあなたの生涯を美しくかざり、臨終を迎えるときはあなたを導いて極楽に生まれさせてあげましょう」と語訳くださっている四句の偈文であります。

「親鸞聖人は比叡山で修学していた、在家、民衆の日暮らしと隔絶した出家仏教(法然聖人はこれを聖道門とよばれました。 )を捨てて、在家の人々に阿弥陀さまの本願による念仏という救いの道(法然聖人はこれを浄土門とよばれました。 )を説かれていた法然聖人のもとに行く決心をされます。それによって親鸞聖人は在家仏教の道を歩んでくださる」となります。

「在家仏教」この意味について梯實圓和上が『親鸞聖人の信心と念仏』というご本の中に「非僧非俗の仏道」としてご解説くださっています。和上のご本を拝読させていただきましょう。『この夢の告げを機縁として、法然聖人に遇い、出家・在家、善人・悪人をへだてなく救いたまう本願の念仏を聞かれるわけですが、それは在家のまま、まことの仏道に転換するような道だったのです。妻を持ち子を持ち、そして在家の生活をしているけれども、お念仏の申せる人生ならば、

それは仏道としての意味を持つのだということです。社会生活を、普通の在家の生活を、仏道としての生活に転換していく。それが本願念仏のはたらきなのです。ですから、在家仏教というのは、ただ妻を持ち子を持ち、肉食妻帯すればそれだけでいいものではありません。それならばただ仏教が世俗化しただけです。世俗化した仏教を在家仏教というのではありません。世俗化した仏教に世俗を救う力なんてないでしょう。世俗というのは愛憎にゆれながら営まれる毎日の生活のことです。在家仏教というのは、世俗の生活を仏道に転換していくから、在家仏教というのです。

当時は、妻を抱えて、在家生活を送る僧侶は半俗半僧の「俗聖」と呼ばれていました。俗ともつかず、僧ともつかぬ、中途半端な者という意味でした。しかし親鸞聖人は後に妻子と共に生きるご自身のことを非僧非俗(僧に非ず、俗に非ず)といわれています。在家の生活(非僧)を、仏道の真実を味わう道場としての意味を持つように転換する(非俗)から在家仏教なのです。これだけは間違わないようにしないと、真宗が仏教としての意味を失ってしまいます。

世俗化した仏教というのは本当の仏教ではない。ただの仏教の墮落に過ぎないのです。

今、親鸞聖人がおっしゃった非僧非俗は、世俗の生活を、仏道として莊嚴していく、そういうのが念仏の生活というものだということです。そして、それを観音さまは「一生之間能莊嚴」といわれたのです。それで、親鸞聖人は、やがて恵信尼さまと結婚し、世俗の生活をしながら、しかしそこで仏道としての人生を味わって行かれたのです。 (自照社出版『親鸞聖人の信心と念仏』)

出家・在家、老少・男女、善悪・賢愚：あらゆる分け隔てのない阿弥陀さまの本願念仏の救い。法然聖人が説かれていた仏教はまさに在家仏教そのものでした。「阿弥陀さまのご本願のおはたらきはね、日々の暮らしのいろいろな出来事とおして、その中から確認し、味わっていただくんでしょね。」これも梯實圓和上のお言葉です。

在家仏教を歩まれた、親鸞聖人と恵信尼さま、そのお二人の念仏生活はどのようになされたのか。そんなところを来月に…。